



人間牧場主・年輪塾々長
若松 進一

道の駅四方山話

道の駅物語の始まり

道の駅の発案のもととは、広島で行われた「中国・地域づくり交流会」（1992年1月27日）で山口県船方農場の坂本さんが、「鉄道に駅があるように、道路にも発言がきっかけで、当時ドライブインとして営業していた島根県「掛合の里」の見学会（1991年7月6日）で、道の駅の原型がここにあるといわれ、その後道の駅の実験を経て、1993年2月に登録制度が創設され、急速に日本全国へ広がって行きました。

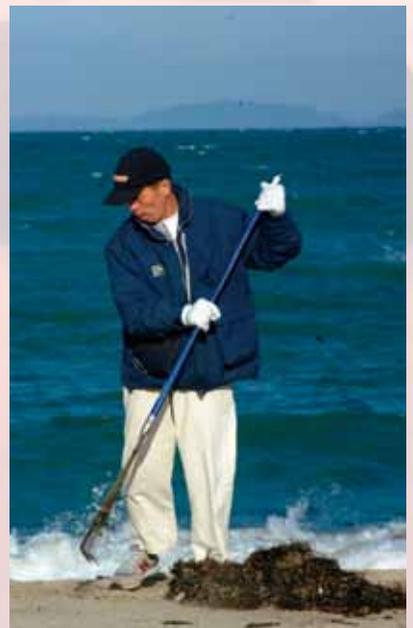
道の駅は今

登録されている道の駅は現在全国各地936カ所、内四国には香川18カ所、愛

媛23カ所、高知21カ所、徳島14カ所の合計76カ所あります。道の駅の規模や機能や運営もまちまちで、最初から道の駅として整備したものや、他の施設として整備したものを道の駅に登録したもので、これまた様々のようです。

道の駅には、高速道路のパーキングエリアと同じように、道路情報を提供する情報発信機能や、ドライバーがトイレ休憩などに立ち寄る休憩機能、それに地元の特産品などを販売したり地元の人と交流する地域連携機能という3つの機能があるといわれています。

ある時期、日本全国に道の駅ブームが起り、多くの市町村が道の駅を造りました。しかし3つの機能をバランスよく発揮して健全経営ができていた所はほんの僅かで、中には集客もままならず、個性ある商品開発もできずに赤字経営を余儀なくされている所もかなりあるようです。加えて道の駅を模写したと思えるようなまちの駅、川の駅、山の駅、海の駅、最近では空の駅など「疫病」ならぬ「駅病」とも思える類似施設の乱立で、魅力を失って苦境に立たされている道の駅があり、将来に暗雲が立ち込めているようです。



道の駅に関わって思うこと

私は行政職員として「シーサイドふたみ」という道の駅を造り、地域振興課長でありながら二足のわらじを履き、駅長として道の駅を経営した経験を持っています。「通過する町から立ちどまる町へ」を合言葉に自治省の地域総合整備事業債の採択を受け、9億円余りで施設を造りました。海に面した土地を埋め立て国道改良事業や養浜事業と組み合わせ段階式護岸、人口砂浜、突堤などを含めると町の年間予算に匹敵するような大型プロジェクトだったため、「人が来なかったら」「赤字になったら」など反対意見も多くて根強く、議会で「赤字になったらどうするのか」という質問に、「赤字になったら黒ボールペンで書きます」と答弁し、議員を激怒させたことなどが随分私の頭



を悩ませました。

全国の類似施設をFS調査などで丹念に調べ、集客と黒字経営のメカニズムを作り上げ

ました。しかしそれらは前例や成功事例を真似た机上のシミュレーションでしかなく、折角反対を押し切って立ち上げた第三セクターも、最初はまったく機能しませんでした。

幸いなことに双海町では、人づくり、拠点づくり、住民総参加の日本一づくりなど夕日をテーマにしたソフトによるまちづくりがかなり濃密に行われていて、集客も経営も様々な失敗はあったものの、整備途中で施設を道の駅に方向転換を余儀なくされても、夕日をテーマにした個性ある物語が次々と生まれ、他に類を見ないオンリーワンの道の駅が誕生したのである。

道の駅に必要な3つのキーワード

お陰様で平成7年の開業以来15年間一度も赤字になったことはなく、出資をした役所を含む8団体には毎年5パーセントの配当を行っているのです。その成功を支えてきたのは物語づくり、特産品づくり、美しい町づくり、それに職員の想

いづくりでした。

シーサイド公園には夕日の物語が沢山あります。夕日のミュージアムや恋人岬、童謡の小路など様々な仕掛けが施された道の駅は、パラグライダーやシーカヤックの基地としての機能も備わり、全国夕日百選や全国恋人の聖地に選定されていることもあって、各種イベントのほか結婚式まで行われています。

特産品の中心となっているじゃこ天は漁協女性部の実演販売店で、浜のおはちやんたちの働く場所としてすっかり定着、ラヴじゃこ天や夕日の望遠鏡など行列のできる店として年間売り上げ1億円を目指して頑張っています。夕焼けソフトクリームや夕日コーヒーなども話題をさらいました。

別名「夕やけこやけライン」と名付けた海岸国道は、別名「ハ・ナ・ミ国道」と呼ばれ、水仙や菜の花、酔芙蓉、ツワ



ブキなどの花々が一年中咲き乱れます。ポケットから種を落として育てた逸話のある菜の花だけでも、冬から春にかけて相当の観光客が訪れ、点と点を線で結んでいるのです。最

近は、木造校舎では県内現役最古の翠小學校を拠点にしたグリーンツーリズムも道の駅との相乗効果を上げています。

私は役所を退職するまでの12年間、毎朝5時から3時間、道の駅シーサイドふたみの人工砂浜を掃除しました。寒風吹きすさぶ真冬の海岸には膨大な量のゴミや海草が漂着します。それを熊手と一緒に車で掃除する作業は想像を絶するような重労働でした。駅長でもあり課長でもあった私の掃除をする姿は、いつしか関わる人たちに①楽しい②美しい③新しいという3つのキーワードがあることを感じてくれたように思うのです。つまりこの3つは道の駅が持ち合わせなければならぬ大切な宝物なのです。楽しくて、美しくて、そして常に新しければ人は集まり経済が生まれるのです。

多過ぎて まるで駅病 みたいですが
残つてゆくは オンリーワンかも
楽しくて 常に美し 新しい
そんな場所なら 人は集まる
じゃこ天の おばちゃん笑顔 地の言葉
化粧せずとも 心引きつけ
12年 ただひたすらに 掃除する
冬の寒さも 今は思い出
(若松進一笑売啖呵より)